

平成27年度 第3回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会 議事録

日 時 平成28年 3月9日(水) 18:30～21:00
場 所 三重県伊勢庁舎 401会議室
出席委員 松本 金矢、魚住 明生、亀谷 章、清水 清嗣、石野 雅彦、山北 佳宏
斎藤 陽二、前田 藤彦、中西 正典、片山 嘉人、木村 元茂、浜田 元宏、
奥井 準次、本多 亮介、笥 佳人(木下元美委員代理)、森田 豊人、
掛橋 靖、池之山 繁生、東川 知子(池田拓司委員代理)、
欠席委員 池田 久、柴山 昌弘、宮崎 吉博
(事務局) 教育政策課長 宮路 正弘、教育政策課長補佐兼班長 辻 成尚、
高校教育課指導主事 谷奥 茂
教育政策課 上村 和弘、宇陀 和彦、西 達夫

開会

○事務局

定刻になりましたので、「平成27年度第3回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会」を始めます。

まず、本日の配付資料について確認させていただきます。事前送付させていただきました事項書が表紙の2カ所留めの資料と「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」の配付資料がそれぞれ1部です。それから、本日、机上に、座席表と右肩に「資料3改」と書いてある資料、加えて、「平成28年度三重県立高等学校後期選抜志願状況(最終)」という資料を置かせていただきました。

なお、本会議は公開で行っています。また、議事録を作成する関係から音声を録音させていただきますので、ご発言はマイクを通していただきますようご協力をお願いします。

それでは、事項書に沿って進めさせていただきます。まず、開催にあたり、県教育委員会事務局教育政策課長宮路正弘からご挨拶申し上げます。

1 挨拶

○宮路教育政策課長

本日は、第3回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会に出席をいただき、ありがとうございます。今年度は本日が最終となります。今年度の取組として各市町のPTA連合会・連絡協議会の皆様、教育委員会の皆様方にご協力をいただき、「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」を開催してきました。10月の志摩市を皮切りに1月中旬から下旬にかけて、この地域の7市町全てにおいて開催することができました。その中では、小学生・中学生の保護者、教職員、また、地域の方々を対象に当地域が迎える少子化等の現状について説明させていただき、

今後の県立高校のあり方についてご意見を伺いました。7市町合わせて416名の参加をいただき、質疑応答やアンケートを通じて貴重なご意見をいただいたところです。

本日の協議においては、保護者や地域の方々からいただいた意見を資料として出させていただいていますので、参考にしていただきながら、当地域の高校の特色化・魅力化と適正規模・適正配置の両方の観点から、どのように活性化を図っていくかについてご協議いただきたいと思います。

また、既に発表しております前期入学者選抜等の合格内定者数や、後期入学者選抜志願状況を、本日の資料としても提供させていただきました。後期入学者選抜は明日実施となります。各高校の志願状況を見ますと、当協議会が対象としているいくつかの高校については、依然として厳しい志願状況にあると考えています。実効性のある方策をできるだけ早い時期に実施できるよう検討していかなければならないと考えているところです。本日も21時までという限られた時間ではございますが、さまざまな角度から貴重な意見をいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局

座席表をご覧ください。本会議の委員名簿とともに本日の座席表を掲載しています。本日、明野高校の池田委員、伊勢市教育委員会の宮崎委員、南勢小学校の柴原委員が公務のためにご欠席との連絡をいただいています。また、弘道小学校の池田委員の代理として布施田小学校の東川委員に、また、鳥羽市PTA連合会代表の木下委員の代理として同PTA会長の箕委員に出席いただいています。亀谷委員につきましては少し遅れられると連絡をいただいています。その他の方も間もなくおみえになると思いますので、このまま進行させていただきます。

それでは、松本会長にご挨拶いただきまして、その後の進行をお願いします。

○松本会長

皆様、お疲れのところ、お集まりいただきありがとうございます。先月、鳥羽・志摩・度会地域のワーキング会議を開催し、「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」で出された保護者や地域の方の意見やアンケート集計結果に基づいて意見交換を行いました。その中において、各高校がどのような特色ある取組を行っているのか、基礎学力や進路指導の充実においてどのような取組をしているのかについて、もっとPRすべきではないかという意見がありました。また、高校の適正規模・適正配置につきましては、今後、本当に主体的に協議していかなければならないという厳しいご意見をいただきました。

本日もこの「考える会」からの意見を資料として協議いただきたいと思います。今後高校に進学する予定の子どもたちやその保護者の意見を大切にしながら、学ぶ場がよりよいものとなるということを念頭に置いてご協議いただきたいと思います。この協議会において繰り返し見通しを示しているとおおり、平成30年を越えると中学校卒業生数が急速に減っていくことが予想されています。来年度にはある程度の方向性を出していかななくてはならないことですので、今年度最後となる本日の協議においては、特にこの1年のまとめと来年度につながっていくご議論をいただきたいと思います。

それでは、事項書に従って進めていきたいと思えます。2番の報告事項「(1) 第2回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会の概要について」及び「(2) 第2回鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議の概要について」、一括して事務局から説明願います。

2 報告事項

- (1) 第2回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会の概要について
- (2) 第2回鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議の概要について

○事務局

それでは、1ページ「資料1」をご覧ください。前回、第2回協議会は11月16日に行いました。三重大学の西村訓弘副学長をゲストスピーカーにお迎えし、地域活性化の視点から地域と高校との関係についてご講演いただき、その後、意見交換を行いました。概要の最初の部分は、西村副学長の講演の中身をいくつか抜粋してあります。1つ目、これからの社会を変えていく人材を育成するためには、高校時代に好奇心を育む必要がある。そのためには学校で基礎・基本を教えたうえで、学校と社会をつなぐ役割を地域の子どもたち任せるという内容でした。4つ目、地域の子どもたちが地域のリーダーや1次産業のプロとなるよう、地域で徹底的に学ぶのであれば、1学級30人という規模もあり得るのではないかとということ。5つ目、三重大学では県全体を研究フィールドとするために伊勢志摩地域と東紀州地域にサテライト校をつくる計画を進めているので、地域の高校とも連携を図り、将来の地域のリーダーを育成する教育に役立てたいなどのお話をいただきました。

その後、委員の皆様からいただいたご意見を4つほどあげてあります。1つ目、県立高校である以上、ある地域だけ小規模校で教育を行うことは簡単にできないのではないかと。3つ目、鳥羽・志摩・度会地域の生徒や保護者は、進学や就職のために伊勢市内の高校への進学を希望しがちである。将来、地域で活躍する人材を育てるにあたっては、まず、そのような保護者の意識を改革することが必要ではないかというご意見。4つ目、高校生に地域で自立して生活している大人のモデルを見せることが大切であると感じた。地域全体の動きとして、そのような仕組みづくりができることよい等のご意見をいただきました。

前回の後半は、「伊勢志摩地域高等学校活性化にかかる保護者等への説明について」ということで、「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」を市町ごとに開催することについて、別添のスライド資料を見ながら内容について説明させていただきました。詳細は協議事項のほうで報告させていただきますが、2つ目の意見にあるように、各地域にある高校の校長が、学校の魅力をアピールするなど高校からのPRの場を設けるとよいのではないかとご意見をいただきましたので、いくつかの会場では地元の高校の取組等の紹介もしていただきました。その他に、説明会で子育てをしている若い保護者の意見を聞き取ることが大切だということもいただいています。詳細は協議事項のところでも説明させていただきます。

3～4ページは、「考える会」でのアンケートの結果を参考に行った、第2回鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議の概要です。ここでの意見につきましては、協議事項の中でアンケートの中身を紹介しながら説明させていただくほうが協議につながりやすいと思えますので、

この場ではアンケートをもとに協議をしたという報告だけさせていただきます。

○松本会長

ただいまの説明につきましてご質問・ご意見はございませんでしょうか。

それでは、協議事項に入りたいと思います。「3 協議事項(1)伊勢志摩地域県立高等学校の活性化について」、伊勢志摩地域高等学校の活性化を考える会のアンケート集計結果を踏まえて、事務局から説明願います。

3 協議事項 (1) 伊勢志摩地域県立高等学校の活性化について

<論点1>伊勢志摩地域の各県立高校の特色化・魅力化について(小中学生やその保護者への周知・情報発信について)

○事務局

まず、本冊5ページにあります資料3について説明いたします。これは志願変更前の2月29日現在の資料ですので、本日、右肩に「資料3改」と書いてある資料を机上に置かせていただいております。こちらをもとに説明させていただきます。伊勢志摩地域の高校が一覧となっていて、入学定員の列があり、その横に「12月18日希望者数」という列があります。県教育委員会では冬休みに入る前の中学校3年生が三者懇談を終えたあたりに「進路希望状況調査」を行い、各中学生に希望する進路を1つだけ書いてもらっています。県立高校を書く生徒もいれば、私立高校や、定時制高校、就職等、生徒によって様々です。それぞれが1つ希望を書いて、その集計結果から、県立高校を希望する進路先として書いた生徒の人数を公表しています。1月20日の新聞紙上にも公表されている数字です。

その次の「前期選抜等」というのは、既に2月9日と10日に実施された前期選抜入試の結果で、合格内定者数が発表されています。明野高校を例に見ていただくと、「生産科学科」の入学定員は40ですが、前期選抜の募集定員は20となっています。それに対して52人が志願し、合格内定者数が22人となっています。前期選抜では面接や作文等を中心に実施されますので、合格者と甲乙つけがたい場合には、前期選抜の募集定員の1割の範囲内で合格内定者数を増やせることになっています。そのため、募集定員が20人に対して22人の合格内定者が出ているわけです。入学定員から前期選抜の合格内定者数を引いたものが後期選抜の募集定員となります。

募集定員に対して最終志願者数とありますが、出願を一度締め切って、その後、志願変更期間が3月3日から3月7日までであり、その最終的な志願者数が、そこに書いてある数字です。それに対して志願倍率が出ていますが、募集定員に達しない厳しい志願状況にある高校もあります。

あと、参考資料として三重県全体の後期選抜志願状況を付けさせていただきました。これも昨日、新聞紙上で発表されたもので、県全体の各高校の最終的な志願状況が載っています。参

考にご覧いただけたらと思います。

次に、「考える会」の開催状況について、6ページの資料4をご覧ください。伊勢志摩地域全市町7カ所で開催させていただきました。志摩市だけはPTA連合会の講演会の一部として10月26日に開催しましたが、そのほかの市町は1月中旬から下旬に開催しました。それぞれのところに内容を書かせていただいておりますが、夏に実施した東北交流ボランティアに参加した中学生、高校生による活動報告や、各高校の取組の報告を合わせて実施した会場もあります。

写真の上に数字が書いてありますが、7会場全体の参加人数合計は416名でした。右下の写真にありますように各会場で各高校の学校案内を自由に取っていただけるように、各学校の内容がわかるカラーのリーフレットを用意させていただきました。

説明の中では、この協議会の主な協議内容である、「高校の特色化・魅力化」の説明と「適正規模・適正配置」を協議していることを話しました。最後に参加者にアンケート用紙を配付し記入いただきました。その用紙が資料5です。このような形で「各高校の特色化・魅力化」、「学校の適正規模・適正配置」の大きく2つについて自由記述で回答していただきました。これから紹介するのは、アンケートの記述を集計したものとなります。

8ページの資料5に戻ってください。最初のところにアンケート回答数が416人中の281人とあります。1カ所以上記述いただいた方が281人いたということです。そのまま載せると膨大な量になってしまいますので、同じ趣旨のものをまとめさせていただきました。例えば、最初の〇ところをご覧ください。「地域に対する誇り、リーダーシップの向上」の下のところですが、「子どもたちにとってよい経験となるとともに、地域に誇りを持てるようになる。」の後に、「南保、度他」と書いてあります。凡例でおわかりかと思いますが、南伊勢町の保護者の方、度会町の一般参加の方、そのお二人がこのような内容の意見を書いていただいて、そのお二人の意見をまとめた文章にさせていただきました。その下の文章は「玉保2、玉他」となっていますが、玉城町の保護者2名の方と玉城町の一般の方、合計3名の方の書いていただいた文章をこのようにまとめたということです。書いてある内容を事務局でよく見せていただいて、分類をさせていただきました。お読みいただくと、この意見はこちらのほうに分類されるのではないかというものもあると思いますが、この場合は意見をどのように分類するかという議論ではなく、たくさんの意見をなんとか限られた時間で皆様に見ていただくために、事務局でこのように分類をさせていただいたという趣旨をご理解いただきたいと思います。事前に送付しましたが、これから協議の前に今一度目を通していただくために、部分的に読んでいきます。

まず、1の「(1)各高校の特色化・魅力化」で、「地域と密着した活動」についていただいた意見が50件ありました。①は読みませんが、その次の「②地域との連携・協力」について、書いていただいた意見が28件ありました。いくつか読んでみます。〇地元の産業(観光・漁業)にとって価値あるものを学べる教育活動にしていくとよい。〇地元の企業と協働し、就職実績の向上にもつなげてほしい。〇地域の学識者が「先生」となる仕組みをつくとよい。〇高校と企業との距離が遠い。〇事業者に補助を出して優先的にアルバイトを雇ってもらい、水産業や観光業との連携を深めてはどうか。〇地域の企業や役場の内定枠が地域の各高校にある

とよい。このようなご意見をいただきました。

次に、黒い丸がついていますが、否定的な意見だと読み取れるものには●をつけました。●小中学校と違って、高校は他市町からの生徒が多いので、地域と密着した活動の教育意義は薄いのではないかという意見もありました。

「③高校の教育内容」と分類してあります。1つ目と2つ目は、各高校ともよく頑張っているとか、こういう活動を続けてもらいたいというご意見でした。○総合学科なら地域と密着した活動がしやすいと思う。○高校がいろいろやっていることに対して、活動が一部の生徒のものにならないように教育課程内に組み入れ、進路実現につながる取組にすべきである。否定的な意見としては、●活動に当たっては進学のことと考えてバランスを取ってほしい。●基礎・基本を大切に学力向上に努めてほしい。このようなご意見をいただきました。

各高校のリーフレットを配付しましたので、「(2)PR」についての意見も41件と結構多かったように思います。○この地域にはさまざまな学びの選択肢があることをPRすべきである。○各高校のカラー印刷の学校案内はわかりやすいので、もっと活用すべきだ。○各高校の情報を子どもたちやその保護者たちに伝える方法を考えるべきである。○普通科の魅力をもっとPRしてほしい。○総合学科をわかりやすく紹介してほしい。○各高校の魅力や特色は地域に広まっていない。その高校に入ったら何が学べるのか、卒業後の進路はどうかを明確にして伝えることが大切である。○地域と密着した活動は高校の様子が周りに伝わるよいPRになる。○自分たちが高校生だったころとは高校の様子がかなり変わっていることがわかった。親も今の各県立高校の様子をもっと知りたい。10ページに移って、○小学校や中学校の保護者に向けて県立高校の説明会をやってほしい。○地域の県立高校による合同の学校説明会を開催してほしい。中3からの学校選びだけでは不十分なので、その結果、私立高校への進学者が多くなっている。このようなご意見をいただきました。

「(3)学力や進学指導の向上」の観点からのご意見が32件ありました。まず、「①進学指導の充実」という点に分類しました。○進学指導の充実を重視すると、進学先はどうしても伊勢市内の高校となる。○近くに進学に有利な学校があれば、伊勢まで進学する必要がない。これは志摩市の5人の方のご意見です。○この地域の進学校のレベルが下がると中勢地区へ子どもたちが流れてしまうので、地域の進学校の大学進学実績を高く保ってほしい。○進路指導を充実して出口をしっかり保障してほしい。

「②基礎学力の充実、学び直し」ということで、○学力が保障されることが大切である。○入学時に学力が低い生徒が学び直しできるようにしてほしい。○補習を強化することにより塾に行かなくても良いような学習指導は魅力である。

③は資格取得を強化してほしいというご意見です。

(4)は「学科の新設」です。○全寮制や特進科の設置を検討してほしい。○普通科ではなく、SBP(南伊勢高校南勢校舎で取り組んでいる **Social Business Project**)科、地方創生科、保育科、看護科等、教育内容を特化させてはどうか。○高齢者の割合が高くなっていくので、福祉に関する活動を増やすとよい。○どの高校にも大学入試を目標とした進学コースを設置すれば、遠くの進学校に通わなくてもよくなる。○学科の選択が進路に結びつく学校づくりが必要である。

「(5) 教育内容」で分類したのは、○小規模校同士が定期的に交流することで切磋琢磨してほしい。○ICT環境を整備し、遠隔授業による教育内容の充実を図るとよい。○高校と企業がタイアップして企業が望む人材教育を進めてほしい。○社会に出たときに必要な人間力や自立につながる教育を充実させてほしい。

「(6) 生徒募集」として分類しました。○地域以外からの生徒の確保を考えるべきである。○子どもたちを幅広く受け入れ、その中での豊かな選択肢を保障してほしい。

「(7) 部活動の活性化」についての意見も7件ありました。○高校を選ぶ際には、部活動はかなり重要な要素である。○レベルの高い指導者を招いて全国大会に出場するような部活動を持つのがよい。

「(8) 施設・設備」に関するご意見もありました。その中で活性化のためにということだと思いますが、○県立高校の施設をもっと地域に開放すべきである。

「(9) 教職員」に対するご意見も、3件ほどいただきました。○学校改善の中心となる教員は異動させずに長期間配置すべきである。○質の高い指導者を配置してほしい。

「(10) 中学校の進路指導」に対する要望的な意見も3件ありました。○成績だけで高校を選択させるのではなく、子どもたちの将来のことを考えたアドバイスをしてほしい。○高校を選択するうえで中学校の進路指導は大切である。そのために中学校と高校の情報交換を密にしてほしい。

「(11) 通学条件の整備」についてのご意見は11件ありましたが、すべて大紀町の方が書いています。松阪方面の高校に進学する生徒が多い地域なので通学が不便で負担が大きいという状況があるということで、○通学の仕組みを抜本的に考えて取り組む必要がある。○スクールバスの配備をしてほしい。このように、通学条件の整備をしてほしいという意見が多くありました。

(12) は、いろいろな各高校の活動状況や取組等を紹介したこともあり、特に鳥羽市、志摩市、度会町、南伊勢町の地元の高校の取組を紹介する中で、学校ごとについての意見をいただきました。これは協議会の協議内容ではないので説明はしませんが、一部否定的な意見もありました。

13ページからは学校の適正規模・適正配置についてです。これは後半の議論となりますので、後ほど紹介しますが、その前に先ほど後に回した、先月2月17日に実施した「鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議」での意見の説明をさせていただきます。3ページ、報告事項の資料2をご覧ください。

まず、「1 高校のより効果的なPRについて」です。アンケートの中でもPRについてのご意見がたくさんありました。そこでワーキングの中での意見ですが、○高校が中学校に出向いて、中学生・保護者・教職員に高校について直接語りかける場を持つことは重要なので、機会を増やすべきである。中学校教員も主体的に高校の教育内容を研究することにより、先入観にとらわれず多様な観点から進路指導ができる研さんを積んでほしい。○高校のオープンスクールなどに幼稚園児、小中学生、地域住民を招いて交流することは、高校の教育活動をありのままに伝えるだけではなく、児童生徒が高校生になった自分自身をイメージできるので効果的である。○高校のPRは生徒たちの活動する姿が「地元」や「地域」で見えることを意識して行うこと

が重要である。○高校卒業後の進路実現への関心が高いことがアンケートからわかった。PRする際にはその点を考慮してもらふ必要がある。○各中学校で実施される中学3年生と保護者対象の進路説明会は、一部の高校しか呼ばれず、かつ、1校あたりの説明時間も短いため、各高校の十分なPRの機会にはなっていない。中3対象ではなかなか十分な時間がないといったことです。ですので、○地域の県立高校が一堂に会した合同説明会が実施できたら、生徒・保護者、高校にとっても有意義である。このようなご意見がありました。

(2)は、「鳥羽・志摩・度会地域の県立高校の志願者増加に向けた方策について」で意見をいただきました。○よい活動内容をPRしても、ふだんの生徒の姿が地域に受け入れられなければ地元からの志願者の増加は望めない。○高校が存続するためには、各高校がどのような教育内容を実践したいのかを示し、それが子どもたちや保護者から選ばれることが不可欠である。○この地域の各高校が取り組んでいる地域と密着した活動は、さまざまな力が必要とされ、生徒にさまざまな力量をつけている。これは新しい大学入試制度が目指す方向性にも合致しており、人格形成にも役立つ。より多くの生徒に活動の機会を広げるべきである。このようなご意見がありました。

もう一度、事項書に戻っていただいて、これからの協議事項ですが、まずは今、ご紹介したアンケート結果を協議の資料として「論点1 伊勢志摩地域の県立高校の特色化・魅力化について」の意見交換をお願いします。後半の論点2については、論点1の協議の後、アンケート結果の関係部分を改めて説明させていただきます。

○松本会長

まずは資料の前半部分について、アンケートを中心に説明がありました。高校の魅力をいかに発信し周知するかという点に関して委員の皆様方からご意見をいただきたいと思います。この「考える会」に参加していただいた委員もみえるかと思しますので、当日の様子等もご紹介いただけるとありがたいと思います。いかがでしょうか。

416人という多くの参加者数からも、成果が感じられるのではないかと思います。鳥羽・志摩・度会地域の各高校がそれぞれ特色化・魅力化に取り組んでいるにもかかわらず、伊勢市内への高校に進学を希望する生徒が多い現状が改善されないのは、効果的なPRとなっていないのではないかと。少なくともこれだけ努力して魅力ある活動を行っているということが子どもたちや保護者に伝わらないことには、進学先として選んでもらえないのではないかとと思いますが、その辺が十分なされているといえるのでしょうか。

○掛橋委員

南伊勢町で「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」を実施した際には、平日の遅い時間にもかかわらず予想以上の人が集まってくれました。南伊勢高校南勢校舎の存続に関する関心が高いからだと思いました。また、大学等の進学を目的として伊勢方面へ進学を考えている保護者も数多く集まってもらいました。子どもたちにも大学進学のため、進学に強い高校へ行きたいという思いがありますし、保護者もやはり子どもにはいわゆる進学校に行って大学へ行ってもらいたいという考えがあります。

前回の西村副学長の話にもあったように、今後、地域をどのように考えていくかが大きな問題となってきます。最初この協議会に参加したときに、伊勢市内の委員の皆様と我々鳥羽・志摩・度会地域の委員が、同じ土俵でこの協議をすることは難しいのではないかと発言しましたが、よくよく考えてみれば、三重県の伊勢志摩地域全体として今後のあり方を考えていくことが必要であることに気づきます。この地域の人口減少は避けられません。その中で子どもたちには、希望の進路に進んで、グローバルに羽ばたいてもらいたいと思う一方で、地域の活性化のためにどのような関わりが持てるのか。それらを考える際には、伊勢志摩地域全体として協議を深めていく必要があると考えています。

○松本会長

伊勢市内の高校の定員が充足しているのは、伊勢市以外の地域の多くの子どもたちが進学しているからです。その子どもたちの将来を考える際には、子どもたちが担っていく地域全体を問題として考えるべきであるというご意見です。

○斎藤委員

鳥羽市での「考える会」と、鳥羽高校が行っている情報発信についてお話しします。

「考える会」には私自身は参加できなかったのですが、会の概要は聞いています。PTA関係者はもとより、教職員や市議会議員の皆様にも参加いただいたと聞いています。そこでは鳥羽高校の生徒たちから、「観光プランコンテスト」の受賞報告や、宮城県や福島県の被災地でのボランティア活動についての報告がありました。参加していただいた方からは、鳥羽高校の素晴らしい活動を知りマイナスイメージを払拭できたという意見がありました。また、鳥羽市内の高校の存続を望むというご意見もありました。

鳥羽高校ではニュースレターを発行しており、中学生に向けたものと地域の各家庭に回覧するものがあります。しかし、それらを実際にどこまで見てもらっているかというのは、定かではありません。読んでもらえないこともあるのではないかと思います。甘んじることなく、地域へのPRに打って出ないといけないと思っています。

○松本会長

おっしゃったように紙媒体により文字で情報発信しても、積極的に情報を受け取る姿勢がないと、効果が低いように思います。特に小中学生においてはその傾向が顕著かもしれません。

一方で「考える会」のアンケートで、「高校生の発表を直接聞くことができよかった」という意見があったように、生徒たちの活動の様子を直接見ていただくことは、より効果的なPRであると思います。

両方とも大切なPRの手段であり、ニュースレターをやめればよいということではないと思います。

○寛委員

本日は木下委員の代理で出席させていただいています。鳥羽市で開催された「考える会」に

参加をさせていただきました。PTA連合会として、それぞれの学校の保護者に動員をかけるとともに、市議員、県議員、教員の方々に来ていただくように取り組ませていただきました。一番来てほしかった保護者の参加率が少し悪かったのは残念でした。今後、保護者の方々にももう少し危機感を持っていただいて、考えていただける機会を積極的につくっていく必要があると思いました。

鳥羽高校は、ここ2、3年、大きく変わってきていると思います。答志島の寝屋子制度を体験する取組等、地域と密着した取組がいくつか生まれていますが、そういった取組も地域の保護者たちにはなかなか目に触れないのが残念です。それらの前向きな取組はしっかり評価をしてやってほしいと思いますし、それが鳥羽高校への進学率の向上に結びついていけばいいと思います。

アンケートの中の13ページに、「市内で見かける生徒の服装や頭髪について、改善すべき点が多い。地域という教師が頑張らなければならない。」というご意見がございましたが、私は教員と地域が一緒になって指導しなければ、この問題は解決しないと思います。学校を良くするためにお互いが知恵を出し合っていくことが必要だと改めて思いました。

○松本会長

アンケートの中にも、この地域では鳥羽高校に設置されている「総合学科」がどういうものか知りたいというご意見がありました。保護者にとって、自分がかつて知っていた鳥羽高校と今は様子が変わっている点を周知していく必要があると思います。

○本多委員

私も、伊勢市で開催された「考える会」に参加しました。もう少し大規模に呼びかけて実施したいという思いはありましたが、会場の関係で60人ほどの規模での実施となりました。各小中学校からPTA役員2～3人が参加してくれた感じです。志摩・鳥羽・南伊勢・伊勢の4地域の中では、伊勢市は複数の高校がまだ存在するため、保護者に危機感があまりないというのが実感です。質疑応答の部分でも、危機感を持ったような意見は出ていませんでした。

「考える会」に参加した方が、どれだけ各学校に持ち帰って、それぞれの役員会などで内容を伝えてくれているかが重要だと思います。もっと大勢の保護者に、このような状況を知ってもらうことが大事だということは、常日頃思っています。

県のPTA研修会等で催しを行った場合でも、伊勢志摩地域の保護者の参加率はすごく低いです。私が2年間、県のPTAに関わる中で、南北で保護者の意識に差があるように感じます。教育熱心な方が少ないわけではないと思いますが、教育に関していい話を聞ける機会がたくさんあるのに関心が薄い現状があります。

ですから、我々PTA連合会としても、この「考える会」の内容を、いかに各学校に伝えていくかというのは重要な問題だと考えています。

諦めずに地道に取り組んでいくしかないと思いますし、志摩・鳥羽・南伊勢・伊勢の各地域の県立高校全体による進学フェスタは実施すべきだと思っています。

ただ、実施にあたってはマンパワーが要ります。各学校のPTA役員に誰もなり手がなく

とで苦勞をしているのが実情ですので、そこも理解していただきながら、実現に向けてどうい
う体制づくりが望ましいのか、お知恵を貸していただきたいと思っています。

○松本会長

昨年度の山口県へベンチマーキングに行ったときに、県立高校のあり方の検討結果を教えて
いただきましたが、それと比較すると、伊勢市内の高校も、先を見越して近い将来のあり方を
今から検討しないと間に合わないと感じます。厳しい現実があるにもかかわらず、伊勢市以外
の地域の高校の状況が非常に厳しいので、隠れて見えなくなっています。伊勢市以外の地域か
ら志願者が集まって来なければ、伊勢市内の高校も本当は危機的な状況だと思えます。そのよ
うな現状が伝わらないと、小中学生の子どもを持つ保護者の危機感が生まれえないのではな
いでしょうか。

一方で、北中勢地域では県立高校の入学者選抜において競争が激しい現実があります。そう
なると保護者も高校を選ぶことに強い関心をもつのだと思います。このように保護者の反応に
差があるのが現状ですので、PRする側だけの問題ではなく、受けとる側の状況を見て、どう
いう手立てを取ればいいのかを考える必要があるでしょう。

○中西委員

私も、度会町で開催された「考える会」に出席しました。度会町はその人口と比較すると参
加率が高いように感じました。度会町では動員だけに頼るのではなく、「こういう会があるので
ぜひ来ていただきたい」という周知を大切にしたら結果、PTA関係者だけでなく、年配の方
をはじめとして様々な方が参加していただいたように思います。

アンケートをざっと読ませていただいた感想ですが、例えば14ページの「小さくなくても
地域の高校は残すべきである」に賛成している（理由の明記なし）の50の方が代表される
ように、大半の皆さんは存続を望んでいるのではないかと思います。

今までそういう話を聞く機会がなかったというのが地域の現状だろうと思います。このよ
うな会が開かれるまでは、地域の活性化と高校の存続が関連しているということについて地域の
皆さんはあまり深く考えていなかったのではないかと感じました。「考える会」での話を受け
て、後日、教育長である私に是非話をしたいと何人かの参加者がおみえになりました。「高校は
地域の貴重な財産なので、統廃合が前提の話ではなく、どうやって利活用していくかを教育長
としてしっかり考えてほしい」と言われました。地域の皆さんに関心を持っていただけたこと
が非常にうれしかったと同時に、英知を結集しろと言わんばかりに背中を押された実感を持ち
ました。

このアンケート集計結果を読ませていただきながら、地域の活性化と地域が抱えるさまざま
な問題を踏まえた上で、高校のあり方を真剣に考えていく必要があると思いました。

○松本会長

高校の存続や配置の問題については、この後の論点として協議していただく予定です。当初
は、保護者がそういう意識で集まってくれるかどうか不安であるというご意見もありましたが、

おっしゃっていただいたように非常に多くの方が関心を持って「考える会」に集まっていただきました。これから高校進学を考えていかなければならない小中学生やその保護者の皆様の問題意識をいかに高めていくかというのは重要なテーマだと思います。

アンケートの中には、保護者向けの県立高校の全体の説明会を望む意見がありました。今回の「考える会」も一つの方法ではあったと思いますが、地域ごとに分かれて開催したこともあり、地域を越えた生徒募集には直接的には結びつきにくいという感じもします。このような会に参加者を集めるのはなかなか難しいという問題もあるのですが、地域の県立高校による合同説明会の開催に関して、具体的な動きがあるようでしたら事務局から情報提供願います。

○事務局

前回の第2回協議会終了後に、それぞれの郡市のPTA代表の方々に話し合っただき開催の趣旨については合意していただきました。今年度内の開催は物理的に無理ですが、来年度の開催を実現するためには、年度初めに計画を立てることが必要ですので、本日の協議会後に、各郡市PTA代表の方々に再度お残りいただきご相談いただく時間を取らせていただく予定となっています。

○松本会長

伊勢市内の学校だけでなくこの地域全体のそれぞれの高校がどのような特色や魅力を持っているかを考えて、進路先を決定できるようにするためにも、この地域の県立高校が一堂に会して実施するのは、とても意味があるのではないかと思います。

まだまだご意見があろうかと思いますが、もう一つの協議事項が残っていますので、次の事項に移りますが、もしその中でPRの件に関してご意見があれば合わせていただこうと思います。

それでは、事務局から2つ目の論点の「伊勢志摩地域の県立高校の適正規模・適正配置について」、説明願います。

<論点2>伊勢志摩地域の県立高校の適正規模・適正配置について（子どもたちの学習ニーズに応える学習環境を、地域全体でどのように創り出すか）

○事務局

論点の2つ目は、「伊勢志摩地域の県立高校の適正規模・適正配置について」です。

子どもたちの学習ニーズに応える学習環境を、地域全体で創り出すためには、どのような規模と配置が望ましいかという観点から協議をお願いしたいと思います。まずこの点について、アンケート結果をご紹介させていただきますので、意見交換いただきたいと思います。先ほど会長からもありましたように、1つ目の論点と関連する部分が大きいと思いますので、場合によっては前半の議論に戻っていただいても結構ですので、よろしく願います。

まず、アンケート集計結果の報告の前に、別冊でお配りしてある「考える会」の配付資料をご覧ください。前回もご覧いただいたものですが、そのスライド番号37と38をご覧ください。

い。「考える会」では、適正規模・適正配置については、この協議会でも2つの意見があるという説明をしました。1つは、スライド37番にありますように、「小規模となっても各地域の高校を残すべきである」という意見です。遠距離通学や下宿は生徒にとって大きな負担になるとか、地元から高校がなくなると地域の衰退につながるので小規模になっても各地域の高校を残すべきであるという意見です。もう一方は、スライド38番にありますように、「高校には一定の規模が必要である」という意見です。つまり、生徒が切磋琢磨する中で社会性を身につけるため、もしくは学校行事や部活動を充実するためには、高校には一定の規模が必要であるという意見です。このように2つの意見があるということの説明をさせていただき、それについてのアンケート項目も設けました。

もう少し別の角度からこの観点を説明します。21ページ資料6をご覧ください。これはこれまでも出した資料から、一番左端にあった平成27年度という部分を削除して、平成28年度と今後の部分だけを残したものです。これまで出した資料と数字には変わりはありません。

平成28年度の欄をご覧ください。明日から後期選抜ですが、この地域の平成28年3月の卒業予定者数は2,278人と予測しておりまして、この地域の県立高校の学級数は39学級あります。これが平成33年3月の中学校卒業予定者数は438人減って1,840人となる予定で、この地域の県立高校の学級数も7学級から9学級程度減って30～32学級になっていくだろうという予測を、これまでも資料として示させていただいてきました。これらの予測は、下の※印にありますように、この地域において、県立高校や私立高校の募集定員の比率、中学校卒業者が市町を越えて進学する比率が現在と大きく変わらないという前提でのものです。

伊勢志摩地域には現在これだけの全日制の県立高校があり、そのうち伊勢市内にある学校は、宇治山田高校から明野高校まで上半分の5つの学校です。この5つの学校が平成33年度には22～25学級程度になるだろうと予測しています。予測にあたっては、4学級分の幅を持たせてあります。同じように伊勢市以外の4つの高校（南伊勢高校、鳥羽高校、志摩高校、水産高校）は、平成33年度には、6～9学級程度になるだろうと予測しています。こちらも4学級の幅を持たせてあります。幅を持たせてある一番大きな数同士を足すと34になり、伊勢志摩地域全体の学級数予測の30～32学級を越えてしまいます。よって、例えば南伊勢高校、鳥羽高校、志摩高校、水産高校の伊勢市以外の高校の学級数が、仮に、現在の10学級から9学級となったとすると、伊勢市内の学校の学級数の合計は小さいほうの22学級という数字になっていきます。このケースは、協議会における「小規模となっても各地域に高校を残すべきある」という意見を反映した形となると思います。今ある比較的小さい学校は小規模校として残っていきますが、伊勢市内の学校は29学級から20学級に大幅に減るので、1校当たり2学級ぐらい減るところも出てかなり小さくなっていくのではないかと想定です。

逆に、伊勢市内の高校を現在の29学級から25学級と4学級の減としますと、伊勢市内の高校は一定の規模を保つことができますが、南伊勢、鳥羽、志摩、水産の4つの高校を合わせて6学級ほど減ることが必要となります。そうなると中には存続できない学校もあるだろうということです。こちらは、「高校には一定の規模が必要だ」という意見に当てはまるだろうと思います。このように、2つの想定は2つの意見を表していると考えてください。

これから紹介するアンケートの意見の概要は、それぞれの意見に対しての参加者の感想や考

えであるというふうに読んでいただきたらと思います。

アンケート集計へ戻って資料13ページをご覧ください。「2 学校の適正規模・適正配置について」で、「(1) 小規模となっても各地域に高校を残すべきである」という考え方のもとに書いていただいたご意見が97件あったと分類しました。その下には、意見ごとに、どの市町のどのような方からそのようなご意見をいただいたという分類と人数が書いてあります。

どういう理由でこの意見を選ばれたのかいくつか分類してありますが、まずは「①通学費用や通学時間の負担が大きい」という観点で書いていただいた意見が11件ありました。1つ目、○遠距離通学の負担が増えるので、何とか地元の高校を残してほしい。○これ以上、通学が不便になると物理的に通えないので、大紀町に近い高校は小規模となっても残してほしい。このようなご意見がありました。

②選択肢として残しておきたいという観点からの意見も3件ありました。

説明会の中では小規模校の特色化・魅力化についてもかなり説明しましたので、③小規模教育の強みを生かすという意見もいただきました。○小中学校において小規模学級で育っている子どもたちなので、たとえ小規模でも地元の高校で地域と密着して学習できるほうがよいと思う。○少人数ならではの丁寧な指導を強みにしたらいいのではないか。このようなご意見がありました。

④教育の機会均等という観点からのご意見として、○学校が連携するなどの工夫で小規模校のデメリットは克服できるはずである。条件が不利な地域の教育こそ、公教育が担うべきである。○人口が少ない地域だからといって高校がなくなっていくのはおかしい。都市部の高校と連携するなど工夫すれば、配置できるのではないか。このようなご意見がありました。

⑤地元の活力の維持のためにという観点からのご意見では、○地元の高校がなくなるのは、地元にとってダメージが大きい。○高校生は地域の即戦力になる人たちなので、地域に高校は必要であるというご意見がありました。

⑥学校への愛着というご意見は多く、16件ありました。○母校がなくなるのは寂しいとか、○地域の小規模校は、存在意義を考慮し、1学級規模でも単独校として残してほしい。このようなご意見でした。

特に具体的な理由の明記がなかったものが、50件ありました。○現在の高校の維持をお願いしたい。○地元で学校を残してほしい。このようなご意見です。

一方で、(2) 高校には一定の規模が必要であるという観点に分類させていただいたご意見が51件ありました。市町別の内訳は、そこに書いてあるとおりです。件数は少ないのですが、文章量が大変多いことに気づかれると思います。バラエティに富んだいろいろな意見を書いていただきましたので、いくつかにまとめることが難しかったためです。

まず、「①学習環境」という観点から書かれた意見が21件ありました。○学習にしても部活動にしても、ある程度の規模が必要である。○生徒の視点で考えると、ある程度の人数がいることが学校の機能を果たしていくために必要だと思う。○小中高を通して少人数教育しか受けたことのない人間に、県内外や国内外で通用するコミュニケーション能力が身につくとは思えない。このようなご意見がありました。次のページに移って、○さまざまな地域からいろいろな生徒が集まることでお互いが切磋琢磨することができて、高校生活が充実したものとなる。

○高校には一定の教員数が必要である。このようなご意見もありました。

「②部活動への影響」の観点から書いていただいたご意見は4件ありました。○小規模になると部活動も満足にできないことが心配である。○部活動が十分できない規模では困る。特に団体競技には一定の人数が必要なので、統合によって活動できるようにしてほしい。このようなご意見でした。

「③統合の際の配慮を望む」と分類したご意見が14件ありました。統合が必要だと思うがその際には配慮も必要であるというご意見です。○高校には規模が必要である。統廃合の際は、遠距離通学や下宿に対する補助の施策を考えていくべきである。○社会性の育成のために高校は一定の規模が必要である。ただ、本当に地域に欠かせない高校なら小規模でも残すというバランスも考えていく必要がある。これは、小規模校を全部なくすのではなくて、一部の高校を存続してはどうかというご意見だと思います。○市町が危機感を持って協力している場合は、一定の配慮をしてほしい。○規模を保って残す高校には、今ある学科を加えて残していくべきである。これは、学校がなくなると、そこにある学科もなくなってしまうので、存続する学校にその学科を置くことで存続を図ってほしいというご意見だと思います。

「④生徒のためにならない」と分類しましたが、○地域では小学校も中学校も少人数なので、高校では違う世界を見せてあげたい。○小規模校において人間関係が固定化することは、保護者としては不安である。このようなご意見がありました。

「⑤仕方がない」という分類のご意見が7件ありました。○人口減少に伴い高校の数が少なくなるのは当然である。○周辺の地域に高校を残したとしても、結局定員割れになると思う。このようなご意見がありました。

また、理由は特に記してないのも2件ありました。

「(3) その他の意見」と分類しましたが、「小規模で残すべき」や「一定の規模が必要である」との両方を取り混ぜたご意見や、また、特にどちらというわけではなく、思いや地域の高校の将来像についてのアイデアを書いていただいたような、分類しにくいご意見も含めて71件です。「①具体的な配置について」ですが、○難関大学を目指す高校や地域密着型の高校など多様な選択肢を提供することが大切である。○伊勢志摩地域の中に普通科だけでなく、様々な科が配置されているのはよい。○適正規模はやむを得ないが、小規模がよいと選択する人もいるので、全てを統合せずに一部小規模校を残しておいてもよい。これは中間的な意見になると思います。○分校として残し、週1～2回は混合でスクーリングができたり、サテライト授業をしたりなどの工夫をしてほしい。○私立高校や伊勢市内の進学校の学級数が減らないことのほうが大事である。○南勢地域の県立高校にも看護科を設置してほしい。○他の高校の授業を受けられるような仕組みをつくってほしい。ICTなどを利用してということかもわかりませんが、そういうご意見がありました。○伊勢市内の普通科高校の学級減は困る。もしそうなれば、伊勢志摩地域以外の進学も考えてしまう。このようなご意見もありました。

「②普通科か専門学科か」についてのご意見もありました。○伊勢市内に普通科が少ない。特に学力が平均より少し上の子もたちが選択できる普通科の高校が少ない。そのため、やむを得ず私立高校へ進学している現状がある。○地域の活性化や産業に従事する人材育成のためにも地域の専門学科は重要である。普通科ニーズが高いという理由だけで普通科の募集定員を

残して専門学科を減じていくことは避けるべきである。○専門学科の充実を図り、県内の企業への就職者やその分野への大学への進学者数の増加につなげるのがよい。このような意見がありました。

「③子どもたちの思い」ですが、遠くの高校に進学する生徒がたくさんいるので、○志望校を決めた中3生や高校生に、なぜ遠いのにその高校を選んだのかという趣旨のアンケートを実施したらどうかという意見がありました。

「④施設設備の整備や通学手段の充実」ということで、○地域から高校がなくなるなら、通えない生徒のために県営の寮をつくってほしい。○適正規模や適正配置を決める際には、通学手段の充実を併せて検討すべきである。○地域にいても学べる環境整備を模索すべきである。このようなご意見がありました。

「⑤市町への要望」というご意見もいくつかありました。○市町がまずどのような地域にしたいかを定めないと、どのような高校が必要なのかという方向性が定まらない。○各自治体が危機感を持って対策を採ることが必要である。このようなご意見でした。

「⑥適正規模・適正配置の協議の際の要望」ということで、○小中学校では統廃合がかなりのスピードで進んでいるのだから、県立高校も具体的な統廃合のプランを示すべきである。○子どもたちが一つでも多くの学校から選択できるように環境づくりをしてほしい。○現在と高校の規模や配置が変わる際には早めに周知をしてほしい。○適正規模・適正配置を考える際には、入学希望者数や実際の入学者数を反映してほしい。○少子化を考えたら、専門学科が1学級40人だと、多様な学科の維持が難しくなるのではないか。1学級20～30人にして保つことはできないか。○小規模校を残すにあたっては、1学年2学級は堅持してほしい。○生徒減は仕方がないので、学校の維持と学級減のバランスをうまく取ってほしい。このようなご意見でした。

「⑦その他」ということで、○親の負担を考えると、各地域に学校があるのがいいと思うが、たとえ遠距離通学になっても子どもが行きたいと思えば、無理をしてでもかなえてやろうとするのが親心である。その結果、近くに学校があっても行かないこともある。○中学校卒業段階で進路決定しづらいと思うので、総合学科の配置はよいと思う。○この地域の生徒たちは部活動を重視して進学先を決めることが多いので、部活動の選択肢が増えるようにしてほしい。このようなご意見もありました。

「3 その他」は、本日の議題とは直接関係はありませんが、「考える会」そのものについてのご意見を11件いただきましたので紹介しておきます。○このような会を大切に継続してほしい。○今まで知らなかったことがいろいろ聞けてよかった。○人口減少に伴う生徒数の減少について実感が薄かったが、より具体的に考えるよいきっかけとなった。このように、「考える会」の開催については概ね肯定的なご意見が多かったように思います。

「(2) その他」では、○私立高校との兼ね合いや入学選抜の方法を考えるべきである。○高校は地域の高校に進学したとしても、結局、大学に進学すると地域から離れる。どのように地元に戻ってくるように勧めるかを地域全体で考えなければならない。このようなご意見もいただいています。

以上、後半の論点を協議していただくために、後半の説明をさせていただきました。よろし

くお願いします。

○松本会長

それでは、アンケート結果資料とただいまの説明をもとに、高校のあり方について皆様方からご意見をお聞かせいただきたいと思います。資料6では、伊勢市内の高校の学級数と伊勢市外の高校の学級数は連動していることを確認しました。また、今年度の入学者選抜における志願状況も示されましたが、なかなか厳しい現実もあります。それらの点も踏まえた上で、この地域全体の県立高等学校のあり方について、皆様方からのご意見をお願いします。

○奥井委員

今、両方のいろいろなご意見を聞かせていただいて、両方のご意見になるほどと率直に思える自分があります。子どもたちが希望に応じて選べるような形を考えていかなければなりません。斎藤委員からもお話がありましたように、各県立高校はとてもよく頑張っています。

南伊勢高校南勢校舎においては、SBP（ソーシャル・ビジネス・プロジェクト）がよく話題に取り上げられますが、それ以外の取組もたくさんやってみえます。先日も、南伊勢町を高校生が元気づけようと、吉本興業とコラボレーションをして新喜劇の公演を行いました。約700名の町民の皆さんが集まってきて、「とても元気をもらいました」というアンケート結果もあったようです。それぞれの学校が特色化とか魅力化とかに取り組んでおり、南勢中学校にもそのような高校に進学したいという生徒もいます。

生徒数が減少している地域の小規模校においては、1学級40人という枠を前提として議論を進めると、最終的には0か40かになってしまうので、検討すること自体が難しくなってしまうので、教育特区のような形をとり、1学級20人というような学校を実現できないでしょうか。

それから、ICTの活用も可能です。南伊勢町の地域活性化の話のときにも、ICTを活用して、NTT西日本のコマースでやっているように離れた学校と一緒に授業を行うこともできるのではという意見がありました。

県教育委員会が示している3～8の適正規模へはめ込もうとすると、現実的にはまらないので、いろいろな取組を頑張っていることを評価したり、地域のニーズも勘案したりして、柔軟に考えていく必要があると思います。

南勢中学校は南勢校舎と連携型中高一貫教育を行っていますが、南勢中学校の生徒数がどんどん減っています。南勢校舎へ進学する割合は大体20%～25%で、以前からずっと一定しているのですが、母数が減っているため、結果として南勢校舎への進学者数が減っています。

そういう現実を踏まえ、南勢校舎の活性化の努力を認めて、何とか教育特区的な形を使っても、1学級40人という考え方を再考できないでしょうか。できるかどうかわかりませんが、最近、「特区」というのが流行なので、活用できる方法はないかと思いました。

○松本会長

小規模校の場合は、その特色を認めて少人数構成を可能にしてはどうかというご意見でした

が、現実には定員割れしているために、実質的な少人数学級になっている訳です。

○片山委員

「高校には一定の規模が必要である。」それに反して「小規模になっても各地域に高校を残すべきである。」これらは相反する考え方だと思いますが、よく考えてみると、子どもにとっての選択肢です。私は子どもが幸せであることを最も大切にして考えることが必要だと思います。

南伊勢町は過疎化も高齢化もナンバーワンです。これにはたくさん原因があると思いますが、その中の一つの要因として高校進学があるように思います。「親心として子どもが望むことなら遠距離でも通わせてあげたい。」という記述回答がアンケート集計の中にもありました。中には、通学のことを考えて、南伊勢町から転居して度会町や玉城町に家を建てたりする方が結構たくさんいます。

また、伊勢志摩地域の子どもたちは運動能力が高いこともあって、部活動を頑張りたいため、部活動が盛んな一定の規模のある高校に進みたいという希望が高い現実もあるようです。

そのような流れがあり、南伊勢町については、流出に歯止めがかかりにくいのが現状です。

南伊勢町には奈屋浦というところがあります。水揚げ量が三重県で1位、全国で8位です。これだけの規模を誇る水産業の拠点があるわけです。鳥羽・志摩でも観光業で結構潤っています。そういった部分を活用し、たとえ小規模校であっても特色のある教育内容を高校に望みます。前回の協議会で、西村副学長が地域活性化についていろいろな可能性を話してくれました。伊勢志摩で1次産業を土台としたものをきちんと作りあげていくという内容です。

そういう方向性を見据えて、南伊勢町では、ふるさと南伊勢を愛する教育の充実をはかっています。そしてその教育内容を高校へつないでいきたいと模索しています。地方創生に関する学科が南勢校舎にできないものか。国から松田政策監に来てもらい、三重大学との協働も検討しています。もしこれらが一体となって新たな何か、例えば1次産業を掘り下げて勉強できるような学校を生み出すことができれば、小規模だけれども強みを持った高校になると思います。そうなれば、きっと伊勢志摩地域の強みを生かせる高校となると思います。そういった意味で「小さな規模であっても、各地域の高校を残すべきである。」と「高校には一定の規模が必要である」という考え方の両面をきちんと実現させていくことが、高校活性化のねらいではないかと私は勝手に考えています。

○松本会長

2つの意見がある中で、地域に特色ある高校を残していきましょうというご意見でした。

○前田委員

2つ質問があります。

小中学校にあっては1学級の子どもの数たちは法律で決まっています。県立高校の場合、1学級の生徒数は法律で決まっているのかどうか。

もう一つ、1回目の協議会でも意見として言わせていただきましたが、三重県は南部活性化ということで取り組んでいます。三重県教育委員会は、南部活性化という三重県の方針を受け

て、具体的な取組を考えているのでしょうか。

○事務局

高校の場合、標準定数は、「40人を基準とする」となっており、それに対して国から交付金が下りてくるという形です。

南部活性化については、南部活性化局と連携して「まちばな」等に代表される高校による地域活性化の取組を県教育委員会が支援しながら進めているところです。

ただ、具体的に何か具体的な事業として持っているかどうかという点、県教育委員会としてはできていません。現状としては、ほかの部局や地域連携部と連携し、それらの部局の地域活性化に関する取組に対して、いくつかの県立高校が協力する取組を支援しています。

○木村委員

高等学校の職員として述べさせていただきます。これがみんなの統一された意見というわけではないですが、やはり高校にはある程度の規模が要るだろうというのが我々高校教員の実感です。私も大規模校や小規模校をいろいろと経験しましたが、ある程度の規模があるほうが学校は元気です。子どもたちの元気があります

アンケートにもあったように、生徒が切磋琢磨する中でいろいろな人と接することが必要な年代だと私も思います。

学校行事や部活動の数についても、子どもの数が減ってくると部活動の数そのものが減少していくことは免れません。ですから、絶対ということではありませんが、ある程度の規模があったほうがいいであろうと思っています。

それから、いろいろな学校があれば選択肢は増えるではないかという意見がありますが、1つの学校の中で考えると、例えば100人いれば3つの選択肢ができて、50人になったら2つの選択肢しかできないといったことがあります。スケールメリットということかもしれませんが、ある程度の人が集まる中でいろいろな選択肢ができるという現実があると思います。

○松本会長

学校の規模は人数だけで考えられない部分もあるのですが、「高校には一定の教員数が必要である」という記述がアンケート集計にもありました。生徒数が減ってくれば必然的に教員数も減らざるを得なくて、選択教科目も少なくなってくるとか、あるいは多様な生徒を受け入れられるような学科も設置しにくくなるということもあると思います。

○前田委員

今後、地域において保護者会のようなものを実施しても、今回出していただいているような意見しか出ないと思います。

教育長という立場からは、「絶対に地元には高校は残してほしい。」という意見しか言えません。そのような状況を勘案して、県教育委員会から具体的な活性化案を提示していただきたいと思っています。例えば、「〇〇と△△にこういう寮をつくりましょう」とか、通学用のスクールバスを

通わせたり、部活動の時間に校舎間をバスで移動することで、子どもたちが合同で部活動ができるようにしたりとか、「この伊勢志摩地域の特に伊勢市以外の高校についての活性化を県教育委員会はこうやって進めていきますので、これなら皆様いかがでしょうか」など、前向きな県教育委員会のスタンスを示す活性化案を具体的に出してもらってはいかがでしょうか。

先ほど南部の活性化のことを言いましたが、標準定数の法令上の定めもなく国からの交付金が入りてくる一応の基準になるというだけのことですから、定数に関しては県教委の方針を示せばいいわけですね。ですから、その辺の思い切った改革で伊勢志摩地域の高校はこれからこうあるべきというのを示すことをしないと、同じ協議を繰り返すだけで、結局、生徒数の自然減を待つのでは意味がない気がします。意見はほとんど出尽くしていると思うので、それを受けてどうしていくのかという具体案を、ぜひ来年度は示していただきたいと思っています。

○松本会長

具体的な方針案が見えない限りは、これ以上議論は進展しないのではないかとこのご意見です。

昨年度の協議において、事務局から具体的なシミュレーションを示して協議したことがありますが、協議が硬直化した記憶があります。そういうことをやると、具体的な高校名がイメージされたり、そのイメージが勝手に一人歩きしたりという危険もありますので、非常に取り扱いが難しいのも事実です。

ベンチマーキングを行い、他県の実情も紹介しました。大規模な寮を設置して、地域から来た子どもを集めている例や、工業高校と商業高校が統合した例や、あるいは、過疎化が進む地域の小規模校の特別進学コースにおいてICT機器を活用しながら維持している例等、さまざまな特色ある例も示しましたので、そういった資料等も活用しながら、具体的な案として皆様方の要望にできるだけ応えられるようなものを示していけるようになると思います。

○掛橋委員

今、このアンケート集計にあるように、「小規模校を残す」、「高校にはある程度の規模が必要である」との2つの大きい方向性が出ています。高校の存続だけを捉えていけば、学力の向上のために切磋琢磨も必要ということで、高校には一定の規模が必要なのだろうと思います。

しかし、地方創生の観点からいうと、この伊勢志摩地域から若者が出てしまい、20年後、30年後には人口減少はますます激しくなるというような危機感があります。私がいる南伊勢町というのは、特にその代表格ですので、いつもそういう危機感を持っていますが、志摩市、鳥羽市、度会町の皆様、伊勢市もそうだと思います。これからは今までのように町に活気があって、人で溢れているという時代ではなくなると思います。ますます首都圏のほうに人口が集中して、気がつけば自分たちの地元には誰もいないというような状況も想像できます。

ですから、今、地域の将来像を見据えた形で県立高校活性化協議会での協議を行う必要があると思います。逆にこの協議会本来の存在価値というか、皆様が取り組む協議の内容が重要度を増してくるのではないかと思います。

ただ高校の配置だけを協議するだけでは、協議は堂々巡りとなり結論は出ないと思うので、

少し視点を変えた形で協議する必要があるのではないかと思います。

○片山委員

掛橋委員や前田委員が発言されたことと関連して発言します。

今、地方創生がうたわれており、特色のある計画に対しては地方創生加速化交付金の交付があります。南伊勢町もいろいろなことで取り組んでいます。前田委員が言われたように、この高等学校活性化推進協議会において、出尽くすとまでいうと語弊があるかも知れませんが、委員の皆様の考え方は、それぞれの立場なりにほぼ示されたと思います。

国が地方創生を目指しているという観点で伊勢志摩地域を考えたら、ある意味、先進地域になると思います。私の住む南伊勢町は超先進町です。この流れは、本多委員が発言されたように伊勢市内にも来るかも知れませんが、その時のためにも、今後どのような方向性に物事を進めるのかを今議論していくことは役に立つと思います。

その中で、それぞれのPTAの代表の方たちの生の声は大切です。この前の南伊勢町での「考える会」の時に来ていただいた方の中には結構高齢者がいました。その方々からの第一声は「この地域から高校をなくさないでほしい」でした。「小学校も統合され、中学校も統合され、その上に高校もなくすのか」と言われました。自分も地元民としてそのとおりだと感じました。南伊勢町にはそれぐらい切羽詰まった状態があります。

これだけすばらしい豊かな自然に恵まれている当地域の各市町において、何とかして後の世代の若者達が暮らしていけるようにしてあげたい。三重大学が果たす役割も重要だと思います。そこに高校が参画し、さらに小中学校も加わるような形が理想です。

木村委員が言われたのはそのとおりだと思います。私自身も高校時代は部活動に打ち込みました。そのためにはある一定の規模が必要です。切磋琢磨して学力を上げていくのも大切です。ところが、学力をどんどん上げていくと子どもたちが町を出ていくのです。自分が教員のときもむなしさを感じました。今も教育長をしながら虚しさを禁じ得ません。でも、それでへこたれていたらダメだと気合いを入れています。当地域にはこれだけすばらしい自然と豊かな恵みがある。この町をどうにかして次の世代の子どもたちに引き継いでいく。そのための後継者をしっかりと育てていく。それが南伊勢町の活性化だと思って取り組んでいます。

私も、前田委員が言われたように、県教育委員会が何か具体的な案を出さなければいけない時期に来ていると思います。

○松本会長

これまでたくさんの議論が尽くされ、その結果、徐々に学校が小規模化していくのを見守っているのではなく、もうそろそろ活性化案を具体化しなければいけないのではないかというご意見がありました。一つの高等学校を支援するという考え方からは、答えが出せるものではないかもしれませんが、小・中・高・大も合わせて、さらに受け入れる社会も合わせて、進むべき方向性を見つけ出していかなければいけないのではないかと思います。

前回のお話にもありましたが、三重大学もさまざまな形で地域に貢献できる方法を探っていますが、それがまだ完全に具体的な形にはなっていません。三重大学はこの地域にある大学

ですから、支えていただかなければいけないだろうし、生徒たちに三重大学で学びたいと思っ
てもらう必要があります。そういう意味においても、地域に大学生を連れていって、そこでの
問題を感じるような教育内容も意識しています。

意見が尽くされたというご発言もありましたが、まだご発言いただいていない方にぜひご意
見をいただきたいと思います。

○浜田委員

私が勤務する神島は離島で、鳥羽市に出るまで定期船で45分ぐらいかかります。

今、神島に住むほとんどの高校生は、伊勢方面の学校に通っています。伊勢方面に通おうと
すると、部活動をしなければ島から通うことが何とか可能ですが、部活動をしようと思うと下
宿することになります。そのため、ほとんどの高校生は今下宿をしています。かつて鳥羽高校
の部活動が今よりももっと盛んだったころは、鳥羽高校で部活動をしながらかから通ってい
る生徒がたくさんいました。

もし鳥羽高校が存続できなくなると、神島の子どもたちは、自宅から通えない子がたくさん
出てきます。先ほどのアンケートの中にも教育の機会均等という意見があったと思いますが、
そこは高校での教育を受けたいと願う子どもたちや保護者の願いをかなえていただける枠組み
は存続していただきたいというのが率直な願いです。

○亀谷委員

今、お話を伺っていると、皆様ももっともな意見を述べられておられると思います。

私は、高校には適正な規模がどうしても必要だと思います。その一方で、もう一つの意見と
して、今ある高校を小規模でも残してほしいという意見も理解できます。しかし、実際問題と
して、人口減少とともに生徒が減る状況で、いろいろな高校を全部残すことは無理だと思いま
す。

特色のある学校をつくって地域と密着した活動に取り組むというのがありましたが、伊勢志
摩地域を一つとして考えるのであれば、小規模な高校をそれぞれバラバラに今までどおり残す
のではなく、2つのところを例えば1つにしても、そこに特色のある教育内容を伴った魅力あ
る学校をつくればよいと思います。全部残していたら大変なことになりますし、現実的に無理
な話だと思います。いくつかにまとめることによってある程度の規模を維持し、その上で、地
域と密着するような活動ができる高校をつくってほしいと思います。

あと、進学校に進学させたいということも保護者としては当然考えることですから、例えば、
それが伊勢市内の高校なのであれば、その高校だけに通う寮ではなくて、伊勢市内の全ての県
立高校に通う子どもたちための寮をつくって、そして、そこにスクールバスでの通学が厳しい
郡部からの生徒が入って、いろいろな高校に通えるようにすればよいと思います。もちろんこ
の場合、不便さを与えるわけですから、県からの補助は当然あるべきだと思いますし、スク
ールバスに対しても、今までどういのかわかりませんが、更に補助が必要かと思っています。

高校生であれば寮に入って勉強したって全然おかしくはないわけで、家から通わせることを
原則とする必要もなくなる。そのためには寮が必要だと思います。

今日の新聞に最新の県立高校の志願状況が載っていました。現実問題として、例えば26人の定員に3人しか応募がない学校があるのです。そのような状況で、定員割れをしている小規模の高校を全部残すことは無理だと思います。

○松本会長

場合によっては統合することでそれぞれの特色を生かしながら規模も維持できるというご意見であろうかと思えます。以前に資料として地域の高校の配置・規模を図にしたことがあります。均等な距離で分散して配置されていて、どこかどこかをつなげればみんなが通える中規模な学校ができるような距離ではありませんでした。

また、山口県の校舎制をとる高校では部活動のときにはスクールバスで移動して、ほかの校舎の生徒と一緒に活動するというのもありましたが、伊勢志摩地域の各校の場合、学校間の距離が結構あって移動に時間がかかるため、道路事情がよくなったとはいえ、実現は難しいのも現実です。

○本多委員

伊勢市の総合計画でも2060年には伊勢市の人口も現在の半分の約6万人になると予想されています。何か策を打ったとしても9万人程度になるそうです。このように人口が減っていくのは目に見えている話です。先ほどの資料6でも、平成33年度には現在と比較して一学年あたり438人の生徒減が予想されており、現在39学級あるのが30～32学級となると示されています。結果的にそうになってしまうのです。我々PTAとしては、こういう現実があることを保護者にわかってもらう機会をできるだけ設ける必要があります。そのためには高校が各学校の内容をPRするのも一つの策でしょうし、県教育委員会が他の政策を出すことも有効でしょう。とにかく具体的なアクションを実際に起こしていかなければならないのは明らかです。

先日の「考える会」でも思ったのですが、私学へ流れてしまう志願者数をどうにかして県立高校に取り戻すことができないものではないのでしょうか。現在の前期・後期と分かれている入学者選抜制度も少しは関係しているのではないかと思います。自分の子どもがまだ高校受検を経験していないので詳しくわからないのですが、20数年前に私たちが受検した時とは明らかに違います。聞いた話によると、ある私学では、入学するという意思表示をして入学金を納付すると、すべり止めではなく内定をもらうような感じになっていると聞きました。私立高校に対抗する意味で、県立高校の入学者選抜制度を検討しても良いのではないかと思います。保護者としての意見です。

○松本委員

伊勢市内には選択する普通科高校が少ないというご意見がアンケートにもありましたが、その一つが私立高校になっているのではないかと思います。私立高校は生徒を確保することが生き残るために重要でしょうから、入学者選抜制度やPRについてもよく検討されているようです。そういう意味でも、最初のころの協議会で議論したように、各県立高校の取組をいかに子

どもたちやその保護者に正しく理解してもらおうかが大切な観点になってきます。各県立高校を選択する情報が少ないことが原因で、とりあえず伊勢市内で早く決まる普通科の私立高校に進学するような受検生がいるとするなら、そこは、本当にやりたいことが見つかるような情報を共有する場を設けることで、その流れはある程度くい止めることができるかもしれません。

私立高校を志望して進学する生徒はいいのですが、安易に私立高校へ流れる状況や募集定員以上に合格者を出している状況が、もし高校生の進路希望の把握不足から来るミスマッチによって生じているのであれば、それは補正したいということだと思います。

○中西委員

前田委員の言葉を聞いて、私の思っているイメージをそのまま言っていただいたような気がしました。私も一私人ではなくて、教育長という立場の中でここに参加させていただいています。まだ私は教育長になってから半年ですが、度会校舎の存続に関しては、度会町長を会長とする度会校舎活性化協議会で協議を重ね、公費まで投入しながら、高校の存続が度会町の地域活性化と密接につながるという思いで取り組んでいます。

私はこの協議会に参加して半年ですので、過去にどのような経緯があったのかは勉強不足ですが、前田委員が言われたように意見は出尽くしているように感じます。かつて現職の校長のときにこの協議会に5年間ほど前に出ていましたが、その頃とあまり変わらない印象を持っています。「高校の活性化のためにはある程度の人数が必要です」「何年度にはこれだけ減ります」というような論理は変わってないように感じます。

確かにある一定の規模をもった高校は必要です。100人中100人とも賛同する意見だと思います。ですから、今回のアンケートもすべてが正解ではないかと私は思うのです。それぞれの方が考えていることですから、すべて正解ではないかと思っています。

ところが、行政という立場からこの物事を考えたときには、どう残せるか、どう残していくかという議論へ持っていけないと、我々は前へ進めません。私は勉強不足ですが、例えば、三重県の南勢地域と同じような問題を抱えた過疎に悩んでいるような地域にベンチマーキングにでかけてはどうでしょうか。成功例や失敗例など多くのことが学べると思います。そういったことも資料にしながらか協議していけば、何か次の道が開けるのではないかと私も思います。

○前田委員

先進校視察は私が提案して、既に昨年度に実施済みです。

○東川委員

この会に初めて参加をさせていただきました。私が勤務する志摩市立布施田小学校は水産高校の地元にある学校です。子どもたちに毎年、水産高校から「スイコーキッズ」の案内が夏前に届きます。それを学級の子どもたちに配ると、「やったー、今年も行きたい」という声があがるくらいとても楽しみにしている行事です。「スイコーキッズ」に行った後、子どもたちにいろいろな話を聞いてみると、「いろんな体験ができた。船に乗れた。干物作りができた。こんなことも水高へ行くと勉強できるんやて。」と目を輝かせて報告をしてくれます。それから、「水産

高校のおにいさんやおねえさんがすごく優しく、いろんなことを教えてくれた、いいおねえちゃんやったよ、あんなおにいちゃんもおったよ」と生き生きと話をしてくれます。水産高校が毎年やってくださる行事が、地元の子どもたちに、地元の高校のよさや具体的な教育内容を体感させてくれるのだと思っています。

「両親が海に関わる仕事をしているので、私も後を継いで仕事をしたいから水産高校へ行って勉強をしたい」という夢を語る子どももいます。そういうこともあって、地元にいる子どもたちや地域の人たちにとっては、そういう魅力のある学校を本当に残してほしいという思いを抱くのだと思います。そして、そういう夢を持つ子どもたちがいる限り、高校をしっかりと地域に存続させてほしいという思いを強く持っています。

しかし、一方で、どこでこんなことを聞いてきたのかなと思うような、地元の高校に対するマイナスイメージを語る子もいます。「勉強をちゃんとしないと〇〇高校しか行けないよ」というような発言です。おそらく古いマイナスイメージを持っている大人からすり込まれたのだと思います。

地元の高校がこんなにすてきな取組や特色化・魅力化に向けて取り組まれていることが、「スイコーキッズ」のような取組を通じて、毎年、地域の子どもやその保護者に学校を開放し、学校のすばらしさを地域、保護者に発信していくことで、その学校に行きたいという子どもも増えるでしょうし、保護者も子どもを通じて高校のすばらしさを知ることができると思います。地道にそのような学校の良さを小学生のうちから肌で感じられるような取組を続けていくことが、将来的には地元に残って学びたいという生徒や地元に残る若者の増加につながり、ひいては地域の活性化にもつながると思います。ですので、小規模であっても学びたいと思う子どもたちがいる限りは、地域の高校の活性化に向けて取り組んでいただきたいです。

○松本会長

どういうスタイルの高校で学ぶのが望ましいかというイメージが固定化されてしまっているように感じています。座学だけをやってテストの点が上がればよいというような発想がどこかにあるのではないのでしょうか。それが最終的には、具体的にやりたいことが見えないまま、普通科に行けば進学できるだろうというような発想へとつながっているのではないのでしょうか。

伊勢志摩地域の各高校が特色化・魅力化のために取り組んでいる内容は、ただ単にアピールをしているだけではなく、社会的な活動と学びを結びつけて実践することで生徒たちに確実に力をつけていると思います。仕事に就いて働くことができるだけではなく、基礎学力を身につけなければいけないということも実際感じるができるだろうと思います。ただ、保護者たちはそのような形での学びの経験が乏しいため、受け入れられていない現状があるように感じます。

前回は紹介しましたが、大学入試制度が変わりつつあります。記述式内容の入試が取り入れられるという報道がされています。単にマークシートが記述式になるということではありません。記述式の答えを求めるということは、内容を考察して記述しなければできない問題が出るということなのです。ある教科に限定された問題ではなく、例えば国語であっても数学の内容を読み取るような試験が出るとか、社会であってもグラフを読み取る数学の力が要求されるよう

な内容です。このことに象徴されるように、今後、日本の教育のあり方というのは、ゆっくりではありますが確実に変わっていくのだと思います。

しかし、普通科高校に進学したいという気持ちが強いのが現状です。それがこの地域では伊勢市内の学校に集中しているという現状があって、固定化された学び方がまだ大きくは変わっていないのではないかと思います。子どもたちが興味・関心を持つ高校の授業内容により、本当の学力がつくというように授業のあり方全体が変わってくると私は思っています。

○亀谷委員

東川委員がおっしゃったように、水産高校は専門学科で特色があるので、希望者は一定集まると思います。しかし、郡部の学校はみんな普通科です。南伊勢高校度会校舎も南勢校舎も志摩高校も全て普通科です。各地域においていろいろな活動をされているとはいえ、結局は普通科なので専門学科のように特色は出しにくいだろうと思います。伊勢市内にも普通科の高校はたくさんあるわけですから、そこでないとできないという特色は打ち出しにくいだろうと思います。船員さんになりたいという希望の方が一定数存在するので水産高校には人が集まるわけです。地元はその分野の就職先があるかどうかは問題でしょうが、生き残りをかけるためには普通科ではなくて、もっと特色ある学科をつくることを考えていくと志願者が集まりやすいのではと思います。

○松本会長

アンケートの中にもSBP科等の新たな科を創設して、さらに特色を強調していくことはできないかとありました。

終わりの時間が近づいてきましたが、いかがでしょうか。

○山北委員

県教育委員会への質問もありましたが、適正規模の学級定数等については、変更することは可能だろうと思います。各学校とも、地域と密着した活動を頑張っています。普通科であるために特色を出しにくいのではというご意見もありましたが、地域においても普通科高校が果たす役割はあると思いますので、大学進学のある方をもっと保護者の方にPRするなどして理解を深める必要があると思います。

国立大学への交付金の国の基準も運営方針によって10%以上増額になるところや、20%を超えて減額になるところもあります。その評価基準の中に、確か地域との連携という観点も一つ入っていたと思います。前回教えていただきました西村副学長のお話をもっと保護者の方にも聞いていただく必要があると思います。

度会校舎については、生徒たちが一生懸命活動している中で廃校だけは避けたいという気持ちが強いです。教育の機会均等という観点からも、小規模になっても各地域に高校を残すべきではないかというのが私の考えです。

三重県では移住相談センターを東京に設置して相談窓口を開設していると聞いています。その中で、環境のいいところで子育てをしたいという相談もたくさんあると聞いています。同じ

県の中ではそういう活動方針もあるのですから、県教育委員会もそのような流れを踏まえて地域の維持と活性化の観点で、地域の高校の存続に向けて配慮いただきたいと思います。

○清水委員

特色ある校風をつくりあげるためには、おそらく10年15年単位の年月がかかると思います。各地域の小規模校を残すために、この10年近く取組をしてきたにもかかわらず、それぞれの学校の地元から進学する割合がその地元全体の進学予定者の10%から20%台にとどまっているという現状が、その取組に対する答えだろうと思います。少なくとも平成33年度までの工程表をつくる際にどのようなアプローチをするのかということをもう少し明確に示す必要があります。例えば、地域にその高校を残したいのであれば、その地域からその高校に進学する割合を30%~40%に上昇することを5年間の最低目標にするなど、活性化の目標達成のためのアプローチの仕方はいろいろあると思います。

今各高校が取り組んでいるのは、社会との接点をとってパブリシティーで打ち出していくという戦略です。それは一要素であって、それだけでは、先ほどのような目標はなかなか達成できないと思います。いろいろな観点で低評価を受けているところに目を向ける必要があります。入学者の中には伸びる可能性を持った生徒はかなりいると思います。そういう子どもたちをしっかり伸ばすことを考えたほうがいいのではないかと考えています。

繰り返しになりますが、これまで取り組んだ10年間を厳しく受けとめたほうがいいと思います。平成33年度までの5年間でかなり大胆なことをやらないと難しいと思います。そのためには一点突破することが必要だと思いますので、せひ、工程表の中で具体的にどのような事業をするのかということも明確にしてもらいたいと思います。

企業においてはKPI（重要業績評価基準）という数値目標が設定されて、それに対する進捗達成率を問われているのが現状です。そればかりではだめだと思いますが、学校運営においてもその要素を取り入れながら、かなり大胆にアプローチしないと難しいのではないかと思います。

○齋藤委員

先日3月1日に県立高校は卒業式を迎え、卒業生たちがそれぞれ巣立っていきました。私の地元の鳥羽高校でも、卒業生が泣きながら答辞を読み上げました。「入学当時はなかなか目的意識を持てなかったが、この少人数の中で、時には厳しい指導でしっかり導いてもらった。振り返ってみて本当にここへ来てよかった」という内容を泣きながら話をしてくれました。本当に感動的な卒業式になりました。このように、小規模の中できめ細かい指導をしていただくことによって、確かな力をつけて巣立っていくこともある。一定規模も必要だというご意見も当然ありますが、しかし、きめ細かい指導の中で確実に伸ばしていくことも必要だと思います。1学級40人が標準では、いつまで経ってもこういう議論の繰り返しになると思います。20人、30人規模の学級も検討していただきたいと要望します。

○松本会長

たくさんのご意見をありがとうございました。予定の時刻も迫ってきましたので、これでの議題は終わりにしたいと思います。

(2) のその他につきまして事務局から何かございますか。

4 協議事項

(2) その他

○事務局

協議事項としては事務局からはございませんが、今後の協議の予定についてお願いがあります。

1月末まで実施した「活性化を考える会」のアンケート集計結果に対して、本日はたくさんのご意見をいただきました。本年度については「協議のまとめ」の作成はしていません。

ただ、今後の中学卒業生数を考えると、どのような方向にしていくか早く示せることが大切ではないかというご意見もたくさんいただきましたので、事務局のほうで今後の協議の展開を考えさせていただきたいと思います。年度が変わりますと、委員の皆様方も人事異動や、PTA役員の交代があったりするため、年度をまたいで継続しにくい部分もあるのですが、来年度は、できるだけ早い時期にこの協議会での協議を再開し、一定の方向性が見えるように協議を深めていけるよう工夫していきたいと考えていますので、引き続きよろしくをお願いします。

○松本会長

ありがとうございました。本日の協議事項は全部終わりました。今年度は全3回の活性化協議会でしたが、私のつたない司会のために時間を超過したり、皆様方の十分なご意見を吸い上げたりすることもできなかったかもしれません。協議が尽くされていない部分は来年度に引き継いでいただくということで、本年の協議会を閉めたいと思います。どうもありがとうございました。事務局に進行を返します。

○事務局

皆様、長時間にわたりご協議いただきありがとうございました。最後に、宮路教育政策課長からご挨拶申し上げます。

○宮路教育政策課長

本日も、いろいろなご意見を皆様からいただいくことができました。県教育委員会に対していただきましたご意見は検討させていただきたいと思います。

地元の高校が大事なので、今ある高校をできるだけ残していきたいというのは、我々も同じ思いです。

一方で、本日のご意見にもありましたように、高校には一定の規模があった方がよいというのも現実です。しかし、子どもの数が減っていく状況の中で全ての高校にそれを求めるのも難しい現状があります。

前段にPRの話があったと思います。なぜそのPRの話を出すかといいますと、子どもの選択は大きいと考えるからです。子どもがどこを選んで進学しているかというのはある意味大きな結果です。よって、志願状況を改善するためのPRは大切です。地元で高校が必要であるので、地元の子どもたちにその高校のよさを十分伝えていただきたいという意味でのPRは、高校だけは限界がありますので、市町や小中学校のほうにも協力をお願いしたいところです。いろいろなところで活動して、新聞紙上にも載せていただいています。やはり地域の協力をいただいて、この高校はこのような特色があるということを、中学3年生になる前からわかってもらえるような取組を今後もしていきたいと思っています。

合わせまして、伊勢志摩地域の生徒たちが、この地域全体に進学したい高校がないために地域外へ行かなければいけないということは避けるべきだと考えています。この地域において多様な進路希望に応えられるような高校の規模や学科の内容等を今後、具体的に考えていきたいと思っていますので、今後ともご協力いただきますようよろしくお願いします。

○事務局

事務的な連絡をさせていただきます。旅費等に関する書類やマイナンバーに関する書類を机上に置かせていただきました委員の方で、まだご提出いただけていない方はお帰りの際にご提出ください。マイナンバーに関する書類につきましては、事務局の者による確認作業が必要になりますので、お手数ですが事務局の者にお声かけください。

それでは、これもちまして第3回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会を閉会いたします。お気をつけてお帰りください。どうもありがとうございました。